奥 むめお（1895～1997）について

奥むめお［本名 梅尾（むめお）、旧姓和田］は、明治28（1895）年に生まれ、平成9（1997）年101歳で亡くなるまでの一世紀の間、戦前・戦中・戦後の幾多の激動の時代を、暮らしに根づいた女性運動家として生き貫いた指導者です。

奥むめお（昭和35年）
（中村紀伊氏所蔵）

大正5（1916）年に日本女子大学校家政学部を卒業後、社会問題、労働問題に接近し、女工として働いたこともあります。大正8（1919）年、詩人奥栄一と結婚し一男一女（杏一、紀伊）をもうけます。大正9（1920）年、平塚らいてう、市川房枝とともに新婦人協会の発会式において理事に就任し、女性の政治参加を制限する治安警察法第5条の改正に尽力します。
その後、婦人参政権運動から離れ、名もない人々の暮らしの中にあって、その要望を引き出し、政治的覚醒を促すための運動を展開していきます。

大正12（1923）年に職業婦人社を結成し、機関誌『職業婦人』を刊行して働く女性たちの支援にのりだします。さらに、昭和3（1928）年婦人消費組合協会、昭和5（1930）年婦人セツルメント、昭和8（1933）年働く婦人の家を設立し、働く女性と無産階級の女性に対して、託児所、夜学、産児制限の指導などを行いました。

戦時中は、婦人国策委員として公職に従事し、生活の合理化・共同化、女性の地位向上を図りますが、戦時動員体制のもとで、奥の主張は意図しない形で実現化の一歩を踏み出すことになりました。

戦後は、戦前・戦中を通じて論じ継承してきた理念や活動を発展させ、昭和22（1947）年最初の参議院議員選挙に「台所と政治の直結」を訴えて当選しました。参議院議員活動(3期)の傍ら、昭和23（1948）年に主婦連合会、昭和31（1956）年主婦会館を設立し、女性を消費者として自覚させ、消費者運動を展開しました。